世界盲人福祉協議会の最近の動向

社会福祉法人日本ライトハウス
理事長 岩崎英行

目次

1．世界盲人福祉協議会と私 —— 25年を顧みて ——
2．世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟
   (1) 合同への歩み
   (2) 調印文
   (3) バドベルリープルグにひろ
   (4) 新たな挑戦
3．第6回世界盲人福祉協議会総会より —— アントワープにて ——
   (1) 開発途上国の課題
   (2) 盲人の行動訓練
   (3) 盲人のスポーツ
   (4) 盲婦人問題
   (5) 失明防止
   (6) 盲に対する情報サービス
   (7) 観光と観光地にひろ
   (8) 今日への直視と未来への課題
4．主なスピーチ
   (1) 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟の対話について
       ……………世界盲協会議長ボリス・ジミン
   (2) 輔助資源の活用…………西ドイツ・クリストフェル・プリンデンミッション
       ウォルフガングスタン
   (3) アジア委員会報告…………アジア委員会委員長フレッシュ・アフジャ
   (4) 世界的盲人人口減少における研究の大きな可能性
       ……………ナショナル・アイ・インスティテュート所長 カール・クッフェル
   (5) はなし言葉を通じての情報（ラジオ、テレビその他の情報機関を通じての盲
       と社会のかかわり）…………世界盲協会議長 岩崎英行

— 51 —
1. 世界盲人福祉協議会と私 ——25年を顧みて——

視覚障害者（以下、視障者と略す）に関わる包括的な思想の流れは、今日に至るまで、時には時代の波に流され、または時脈を失りしながら様々な変遷を遂げてきた。しかし特に第二次世界大戦後、これら流れを国際的な立場で集約し、世界的な視野の下で指導体制や協力関係の整備が急務となり、世界盲人福祉協議会（World Council for the Welfare of the Blind以下、世盲協またはWCWBと略す）が発足されました。世盲協は、世界全地域で視障者及びその援助機関との協議により、盲人福祉にかかわる全ての事業、諸問題に言及する事を目的とし、本来的な文脈、個々の視障者及びその援助機関を代表し、世盲協という名において、各国政府を盲人福祉の見通しや国家的な規模で取りくむべき課題を認識させ、その国における視障者の地位の向上や文化的な言語を高揚させるものなのです。

世盲協の総会は5年に1回づつ開催され、役員会は毎年1〜2回、実行委員会は2年〜3年半に1回開かれる事になっています。第1回総会は1964年（昭和39年）パリに開かれました。以後毎年ローマ、ニューヨーク、ニューデリー、サンパウロを経てアントワープへと引き継がれました。私は第1回総会以来、第2回のローマ会議を除いて全ての総会に出席致しましたが、この25年を振り返る時は、感無量なるものがあります。昭和29年と言えば、私がちょうど9歳になった年であり、昭和20年8月の敗戦から数えてまだ復興が浅い時代であります。その当時の日本はと言えども、きっと防空権の穴から生活が地下のパラッツに住居をかえ、食べるものも給配制度から自由に取り入れようになり、交通機関も石炭荷車や屋根の上に飛びついて旅行していた時代から自由に街を歩き、自分の望む街の席で飲めるようになった時代であります。とは言え、日本の国力、国際的信用度はと言えども、まさに4流丸5流丸の程度で、各国からは“12子の子供”と呼ばれていました。更に片手のせまい思いをしたものは、日本人は常に我慢甘言者、軍国主義者と呼ばれた事であります。

鳥居信治郎先生の手引きをして羽田空港からエール・フランスに乗ったのですが、空港には40〜50cmもある草が一面に生い茂り、滑走路も米軍によってやっと舗装されたという状態にあり、待合室も米軍使用のままごと型に立てて兵舎をあいていました。勿論ジェット機となく回転のプロペラ機であり、羽田からパリまでに実に64〜65時間もかかった事を記憶しています。途中ガリグリの補給のためにマニラ、サイゴン、バンコック、カルカッタ、カラチ、パグダッド、ダマス、ローマを経てパリに着きました。最初の香港地マニラに寄りますと、日本人の私達だけが別な待合
案に入れられました。戦争中パターン長島の死の行進により、大憂苦をした日本軍に対する怒りが強く、反戦感情を頂点に達し、日本人を見るとどのような暴力が与えられるかわからないので、保護のために別室に通されたそうです。邸内に行く途中、金網ごしに現地人達がジャッポノジャッポノと色々に呼び口笛をならし、足で大地を踏んでいる姿をいっぱいに忘れる事は出来ません。途中多くの空港で1〜2時間づつ休憩しましたが、その度に持ち物・金・雑費等に対するさまざまな書類が必要であり、くどくどと渡航目的を警察官の前で説明しなければならなかった事もあり、出の1つであります。

パリの総会はユネスコハウスで行われましたが、遠野原とバラックの日本からやって来た私にとっては、シャンゼリゼの輝く国際会議場は、まさに夢の殿堂でありました。この総会において先ず取り上げられた事は、「ゆりかごから墓場まで」の福祉の頂点を目指して、各国が皆先進国が作り上げた教育・福祉への国家社会の義務づけを自覚する事から始まりました。その当時、先進諸国にあっては盲の定義が確立されてはいませんが、殆どの国が盲の定義もなく、義務教育を行なっている国数は多くありません。更に伝染病・栄養失調等により失明者の増加は数限りなく、失明防止への処置も国際的には何らの方法、手段もとられていないというのが実状でありました。因みに、この総会において決議された事項をひろびろとみますと、①盲の定義 ②全盲優先 ③失明防止対策 ④盲教育の普及および宣伝 ⑤視覚の救済 ⑥世界的通路の緊密化 ⑦経済的援助の要請 ⑧盲人に対する社会保障制度確立 ⑨世界標準化機関であり、特にこの中でハンセン氏病（癣病＝決議⑥）の恐るべき蔓延とそれに伴う養盲の教養は、参加者の心を震撼させたものでありました。現在ハンセン氏病は完全治癒が出来、養盲教化という言葉は全く聞かれなくなりました。そして今少し、盲人への特別措置と社会保障の確立（決議③、⑤）であり、如何なる方法を講じても、盲人一人間らしい衣食住を与え、ときに食べて行けるような事が必要であるという切実な訴えがありました。年年しくして最初の国際会議に出席した私にとって、そうした事態は今当時の日本にとっては他国以上に必要であり、各国代表が何となく発言する義務は、とうてい到達出来得ない巡彼方の遥か夢の中の出来事のようにさえ思われました。英米へ渡り、英国王立盲人援助協会（主にイギリス国内の盲人を援助する協会；Royal National Institute for the Blind, 以下RNIBと略す）、英国王立連邦盲人援助協会（主にイギリス国外の盲人を援助する協会；Royal Commonwealth Society for the Blind, 以下RCSBと略す）、エディンバラを訪問するに際し、当時の日本と比較してあまりの格差のあ
るのに目を見張ったものでありました。その1つは盲のために支払われている国・地方公共団体・民間団体よりの財政支出の相違、次いでリハビリテーションの専門職員・指導員の質と数の相違、機械化された盲人用具、一般企業・社会への進出のための組織だった準備とその戦略の多様性の相違、そして最後には盲人を取り巻く一般社会人の盲に対する理解と、盲人自身のもっつ自然と教養の深さでありました。国際会議に出席された方は誰もが深く感動されるとありますが、国力のある国・実力のある国・尊厳を集めた団体等には、休憩の時間であれ食事の時であれ話題と社交の中心となり、人々は知らず知らずにそのまわりに集まってまいります。しかし我々日本人とドイツ人はやはり片身のせまい思いをしなければなりませんでした。参加者達はあの恐ろしい戦争や政治という事を、この会議に極力持ち込まないよう配慮してくれ、我々に常にやさしい言葉をかけてはくれましたが、自分の兄弟・親類・また自分自身が、日本軍によって大きなダメージを受けたという話を耳にしますと、いささか身のすくむ思いが致しました。恐らくこうした事は、戦後の我々がどうかご理解頂けないだろうとは思いますのが、今日の日本を見る時、かつて敗戦という逆境の中によいない日本、そして敗戦ゆえに全てからやり直さねばならなかった日本が、盲人の世界というこの小さな部門においても、当時の世界からどの様に見られ、いかなるレベルにあったかを知って頂きたいと思います。

1959年ローマにおいて第2回総会が閉かれたました。その時の決議の主なものには、
①雇用を目的とする盲人の更生と訓練
②保護条件による盲人雇用
③農村雇用
④工業・商業・専門職に対する盲人の雇用でありました。

1964年第3回総会がニューヨークの国連本部において開催されました。日本の国力も時流を引くため、我が国への誤りをもすれず、日本からは仗添えを入れて実に16人の人々が参加しました。この総会は、盲教育・福祉・職業の面において、既存の哲学が盲人を同情と理解・援助の対象としていたのとは違って、まさに180度の転換を致しました。「ゆりかごから薬場まで」といった日本の福祉・教育の最高理念が、英語自らの手によって引き落とされ、盲という障害を教養・福祉の原点とするよりも、むしろ、人間性その基盤を求め、人間としてどうあるべきなのかの追求こそが、教育・福祉の真髄であると結論づけられました。よって教育・福祉の課題は、盲という障害を他の方法においてどのようにカバーし、可能なかぎり除去する事が出来るかという事こそが必要であって、盲なるが故にという理由でもって教育・福祉・職業を実行するのではなく、盲の盲人の持つ能力とニードにありた個人対象の教育カリキュラムや訓練方法こそが大切であり、一権化された制度や
法律は、経済的価値は有しても、真の目的の完成にはあたり得ないという哲学が樹立されました。盲なるが故にどのような職業を、盲教育はいかなるべきか、盲人教養の法律はどのように制定すべきか、といった視力障害という障害にのみ注目することを、信条としていた人々にとっては、まさに意味の曖昧でありました。盲人は庇護され援助される対象である次元から、有能なる社会の一員として、個の存在を意識し、そこに生存の価値と意義を自覚する事への志向は、人間の尊厳性に何と素晴らしい栄光の座を与えた事であります。この会議こそ視覚の歴史の中で、未来にわたり永久に記録される誠実であったと今なお語り題われています。この時の決議は次のようにしています。①アジア計画 ②ラテンアメリカ計画 ③アフリカ計画
④農村盲人問題 ⑤失明防止問題 ⑥盲人の一般社会への融合 ⑦老齢盲人問題
⑧重複障害盲人問題 ⑨雇用の機会 ⑩盲人補聴具の展示 ⑪スペイン語の使用
⑫世界盲人福祉週間 ⑬点字表記法 ⑭交流障害 ⑮ライオンズクラブにその他の民間クラブへの伝達
⑯盲人団体問題 ⑰財政援助問題 ⑱盲ろう症援助事業への指針 ⑲盲ろう重複障害者に対する法的な援助
⑳身体障害者の権利宣言。

世に言われる人間宣言と共に、特に注目しなければならない事は、全地球的視野において、各々の地区（決議①、⑧、⑱）に対し、適切な必要と思われる指導がなされた事、次に社会への融合という課題（決議⑧）で、現在、教育、就労面で盛んに話題にのぼるインタグレイプト・システム（社会への統合）、新しいリハビリテーションの基盤がここに芽生えた事。次いで重複障害盲人老齢対策への対応（決議⑳、⑲）が呼ばれた事、そして世界盲人振興通と身体障害者の権利（決議⑳、⑲）が示すその事柄において高々と掲げられ、それが国連に伝達される事によって、1881年の国際身体障害者年を実現する一助の芽生えが起きられた事、そして最後にアントワープと延々と引き続き行われてきた盲人団体との協力問題（決議⑲）が、始めにここに登場して来た事も忘れはならない事項であります。こうした事項を持ち帰りた時、日本の国内には盲人さんが大々的な議論を巻き起こしました。盲人にに対しより強力な援助と助成をという立場の人々にとっては、この人間宣言は10年早い道標であり、盲人の可能性を充分発揮したいという人々にとっては、やっと春が来たという思いであった事であります。日本でさえそうした状態であるのですから、既に日本では相当な水の長さが出ていき当時のアジアやラテンアメリカ地区にとっては、まさに道妨もないやさしい宝物が舞い込んで来たといった感じであったに違いありません。盲人は無能であるが故に、瞬間・同情の対象として扱い、法制化を促していた国々にとっては、一足飛びに“盲人は可能性を秘めた有
能する社会人に改める”というこの二体背反の課題を、どれ程倹用に一般社会に説明しなければならなかったであろうか、その徳爾りは充分想像する事が出来ます。
1969年には初めてアソイの地に世界の人々が集まりました。ニューグリーの第4回総会がそれであり、この時の決議の主なものを拾ってみますと次のようになります。１（世界盲人口数の増加率と対策、盲児教育の組織化促進、盲人の社会復帰など）現代盲人の面直する課題を社会に訴える。②技術的革新と盲人用具の開発 ③失明防止と問題解決。この中でも③の失明防止は過去3回の総会のように続く課題ではなく、具体的な形で各国への指名という方法でその実現がたが取り上げられました。開催場所がアジアであり、しかも世界盲人総人口の3分の2を有するこの地区における失明防止は、緊急中の中観事としてその重要性を再認識されるものです。日本の工業化はこの時期に著しく增大し、アジア各地においてその行き過ぎたやり方にエコノミック・アムールという有難くない名前を与えられたもの、この時代でありました。世界の、アジアの開発が日本に寄与したとするとその感である事を思えば、これまでの日本の努力と私への課題が、今一度日本人という観点にかえって、真剣に世界観的視野から考え直さなければならないと自覚させられたものでありました。相撲のラックで言えば、世界の人々は日本に対して前頭筆頭か小結あたりの試合をしていなかったのではないかと考えます。そして今一つは、技術の革新と盲人用具の開発（決議②）であります。
既にニューヨーク総会以後、盲教育・福祉関係者と科学者・心理学者の提携は時々に始まっていました。スウェーデンのウプサラ大学、ソ連のモスクワ大学や視覚失

ア眼科学療協力会（3.5失明防止のための）をこの2年後1971年に誕生させたのもこの決議ゆえであります。

第5回総会は、1974年ブラジルのサンパウロにおいて開かれました。第4回までの総会や各種国際会議は全て北半球において開かれていたのですが、南半球にその場所を移した事は、この地域の人々にとっては開創的な出来事であり、特にラテンアメリカの盲人達にとっては大きな夢をこびとありました。彼等は南アメリカ大陆の盲人ならびに盲人関係者達は、その成果のために全精力を投入し、各国政府もあわせて各種の法律制定に着手しました。総会開催を足がかりにして急速かつ総力をあげて整備された地域は、恐らくここをおいて他にないと言っているんです。ある人は20年の歩みを1年で成し遂げたと言っています。この会議の主な決議にひろってみますと、次のようにになります。①失明予防　②雇用　③開発途上国援助　④研究　⑤研究の利用　⑥サイ・ブライク記念年　⑦社会資源の活用　⑧障害者グループとの相互関係　⑨視覚によるコミュニケーションへの機会　⑩点字の標準化　⑪歩行　⑫弱視　⑬リクレーション活動。この中で特に注目すべき事は失明予防（決議①）であります。国際眼科学会もこれまで独自の立場で失明防止に大きな努力を払ってまいりましたが、この総会を契機にして、本会期中に失明の失明防止委員会と国際眼科学会が1つになって世界失明予防協会（International Agency for the Prevention of Blindness、以下IAPBと略す）が結成されました。更に今1つは他の障害者グループとの相互関係（決議⑧）の中で、1964年以降より続けて来た世界盲人連盟（以下WBFと略す）との関係が具体的に総会の席上で提出され、公式の場ではなお少ない意見の交換と考え方の相違を残した事であります。そのものにはまずをせよとのたえ通り、これまで黙殺、または意図して遮けて通った世間話との関係が、これではいけないという事で1979年の総会に向け、何かと協力の手を広げたいと思って、が作りになりにもそれを手がかり同体共に一致したという事は、歴史的にも意義あるものであります。今1つは、リクレーション（決議⑬）が初めて議題の中に登場した事であり、有能なる社会人として活動するためには、一般の人々とリクレーションを通じて交換する事こそ必要であり、社会人へのパスポートであるとさえ強調されまし
た。やがてそれは1977年にロンドンの実行委員会において、スポーツ委員会が生まれ、国際身体障害者スポーツ協会（International Sports Organization for the Disabled、以下ISODと略す）が生まれ、この会議で誕生しました。1979年アントワープでの第6回総会に出席して、私は日本への期待・尊敬が、こ
れほどまでに大きくて浸透しているかを体験し、感無量なるものがありました。また一面、第1回総会から25年を経た今日、「はるけもなくきつるものかなか」と回想せずにおくわけはできません。感傷的だと言われるかもしれませんが、あの第1回パリ総会で片隅の椅子に小さくなって座り、人々の顔色を窺いながら恐る恐る発言した事も今も差事屋のどこかと見えてさております。昨年5月、世佐協役員諸氏が大阪にまいりました。彼等が来日までに懸願していた日本と、現実に目のあたりに見たそれとの間には、非常に大きな違いがあったようです。先ず新幹線、梅田の地下街の豪華さ、地下における人工の道、夜の夜中でも婦人が1人で歩ける治安の良さ、ゴミひとつないプラットホーム、喉から手の出そうな各種各種の電気製品とかカメラ、こうした近代化の日本の中に完全に保存された歴史の遺産、古代文明と近代文明を何らの不自然さもなく調和させている日本人の知性の高さ、等々は会う度に感激の声となって私に訴えてきました。更に官関係で言えば、世界一流と言われたパーキャン盲学校にも優るとも劣らない大阪府盲学校の設備や教科内容、未だ見えた事もないという身体障害者スポーツセンター、大阪酒造郷の巣く全盲のコンピューター・プラットホーム、100〜200トンのプレスを操作する全盲の工具、規模こそ小さいが実的には高水準をいく日本ライトハウスの感情訓練（盲人用ではない普通の卓球競技を見て）、歩行訓練、生活訓練があり、更に司法面から言え身体障害者雇用促進法が既に制定されている事、しかも雇用していない企業が150億円近い納付金を納めていくその事実、教育福祉面・福祉面にて完璧と思われるまでに整えられた法律の整備、プラットホーム・学校・施設・主要なる道路に数えつけられた点字ブロックや音響信号機等々、まさに彼等をしてよそ短期間にここまでという驚きと尊敬の念をもって日本を眺めさせずにおりませんでした。更により視覚最も問題中の問題としていた事は、大阪にあっては盲学校長・盲人団体長・施設長が大阪盲人問題懇談会を作り、月に1回相互の連絡会をもっている事であり、日本盲人福祉委員会が盲人団体・盲学校・施設によって組織され、更にそこに企業や政府が加わっているという事実は、世盲連との関係で頭を痛める人々にとっては、まさに夢であり理想郷であったに違いありません。そして大阪府盲人福祉センターにおいて行われた国際交流会にあっては、盲学校・P.T.A.・盲人団体・施設・役所の関係者達が一方に会し和気あいあいの協力とやさしさの中に、なおかつ未来に向かっての探求心と信念をもって進もうとしている姿は、望ましい官関係のあるべき姿としてとらえた事でありましょう。人の口は電波よりも早いかどうでしょうか。口から口へ手紙によって伝えられた幻の国日本、ワンダフル日本、という形で第6回総会
に過去のイメージを一新して登場したのであります。

開会式において祝辞が述べられました。国連事務総長、国連総局長の後、サウジアラビア王の祝辞が代読され、英国、その他主要国からのものが読み上げられました。一方で日本の厚生大臣からの祝辞が披露されませんでした。どうした事かと思われていますが、午後の会議の最中、事務局長の方から「インポータント・メッセージが入っているので皆様静聴にされたい。今、日本の厚生大臣からの祝辞が届きました」と前書きとして、橋本厚生大臣からの祝辞が読み上げられました。会場に拍手が起こりました。多数のメッセージの中で読み上げられるよう、より効果的であり印象的でありました。更に科学者との提携、高度な技術水準の対話の中で紹介されたのは、アメリカ・ソ連に次いで日本の大阪大学方式でありました。また失明防止の問題においては、日本船舶振興会、信川記念保健協力財団からの20万ドルの寄付がWHOにされ、それが呼び水となってWHOが失明防止を今後の4大病の1つに取り入れることになったという事も、感謝を与えた1つであります。更に会費値上げのところで、今後是男性は代表会員1人に対し150ドルを徴収していましたが、すっもんだの討論のあげく1人250ドルに値上げが決定した際に、議長は特別に発言を求め「米・ソ・西ヨーロッパは規定の代表会員数（日本は6名）以上、または倍数の会費を輸出国に代わり納入されたい」と申し出ました。第46回アジア会議（1978年）、日本会議に於いても日本代表団は感じたのですが、とくとくとして日本の現況を知る必要はありました。この世界の総会においても、同じ事が言えるのであって、かつて第3回ニューヨーク総会時代には、日本の現況を各国に有効に知らせる事が、代表団の仕事の1つであり、発言する事によって足を踏んだ過去の時代に、もはやきやくなを告げねばならない次元に来た事を感じました。そしてアジア会議の最後の日、本間代表（大阪府立盲学校校長）が締めくくりました。最後の会議（大阪府盲人福祉協会長）と話し合った事（日本には塔摩、鈴、炎があり、盲人が人に顔をなしく自立出来るという事実は、どの国にもまして貴重な宝である。）を今一度深く味わい、これを基盤にして、他の職種への開拓を、より積極的に行う事をこそ、今後の日本の進むべき目標ではないかと再確認した次第であります。
2. 世界盲人福祉協議会と世界盲人連盟

(1) 合同への歩み

本年2月28日より3月1日まで、世界盲と世界盲連の合同役員会が、西ドイツのバドベルレブルグにて開催されるとの通知を受け、きっと心地良い開会前に準備しましたが、一向に見えませんでした。交通公社に関しては重くはありません。やむなく西ドイツ大使館に尋ねたところ、フランクフルトから自動車で約3時間程のところにある会場です。今年の日本は暖冬で案外しのぎやすい冬でありましたが、2月末を通じて出ているフィンランドは寒かっただい、フランクフルト空港に到着しました。予定ではここで一泊し、翌日目的地に向かう事にしていたのですが、偶然にも空港でノビル夫妻にパレットと出会いました。ゾンター会長が自動車で迎えに来ているから一緒に行くというのです。自動車に乗って走りました。ベニチの大型車ではありませんが、たくさんのスーツケースがあるものですから、私の靴の上にもどっかとその1つが騒乱しまし、私の足元にはゾンター会長の可愛らしいペットのスコッティチワが寝ているという始末で、足を動かす事も出来ず、2時間半じっとがマンの子でありました。約1時間程で高速道路の岡場に雪が積もっているのが見え始め、その後積雪は時間と共に増えまわり、かき集められた雪が2m近く、ちょうど川の底を走っているようです。護島は桜の木で、その上に雪が積もって、何百本、何千本とも知れないクリスマスツリーが立てられているようです。時時黒いカップルがスキを演じて道を横切ります。どこかの思いでバドベルレブルグに着きました。それというより、町並みが村という方が適切かもしれない。ここに失明軍人の専用の保養所があります。ここに施設長ゾンター博士は、西ドイツ失明軍人協会会長で、本年8月以降はパキスタンのシャー博士の後を続けて、世界盲連盟の会長になった方です。第2次世界大戦で失明し、片眼は親手です。この保養所にはベッドが百数十台あり、温水プール、体育館、遊戯場、食堂、バー、盲人用具展示室、会議場、研究室、等々が完備され、日本の一流ホテル並みの設備が整っています。話しるとすると、こうした保養所は西ドイツに5、6ヶ所あり、失明軍人であれば無料、または家族同行の場合は低額にて宿泊出来るといいます。一般の盲人もゾンター博士の許可があれば、失明軍人と同様の優遇を受けられるという事です。到着した日は、失明軍人のために講習会が開かれていました。晩餐会にノビル夫妻共々私達も招待されましたが、その席上、バドベルレブルグの市長さんが「この市に初めて日本人をお迎えしました。我々はかつて日露戦争にお
いて、東亜元帥の率いる日本の連合艦隊がロジェント・ウェンスディ沖海戦に敗れた、あの大戦果を忘れてはなりません。かつて日本とドイツは友好国でありました。しかしそ今や、その友誼国ドイツと日本は経済大国となり、東と西で世界の大国として存在している事は感謝すべきです。」

会議の挨拶をしてくださりましたが、いささか時代がかったこの挨拶には、どう反応してよいのかと悩んだ次第です。

1964年に、第3回国際盲協総会がニューヨーク国連本部において開かれました。この時、アメリカの盲目的な国際法律学者ウィン・ブロッック博士によって、世界盲人連盟(The International Federation of the Blind以下国連盲協またはIFBという)が誕生しました。その趣旨と目的は、いささか過激的にして極端ではありましたが、要約すれば「盲人は盲人でしかなかったに違いないが、常に盲人は世の中から次元低いものとして扱われ、その能力も無視されて来た。暗黒者達は、時には盲人に間違を寄せられてくるが、その多くは盲人を利用して、自由の名目を立つ楽達のための手段として扱う事がある。あまりにも多くありました。こうした恥ずかしい社会の制約と聴覚暗黒者の束縛から離れ、盲人自身による教育・福祉を勝ち取ればならない。それには、盲人の人間性を主張し、教育ないし他国の人間を要求する」といったようなものでありました。その後、この団体は急速に発展を遂げ、事ごとに国際協と意見の食い違いや摩擦を起こして来た。というのも国際盲協の中には、暗黒者の役人、教育者、宗教者、社会事業者、盲人に関心を持つ企業家、ライオンズ・ロータリーのメンバー、眼科医、等々が入っており、更には盲人団体の長も加盟しているにもかかわらず、理由は色々あったにせよ、暗黒に言葉暗黒者がそのメンバーの半数以上を占めているという理由によって、事ごとに不協和音が生まれました。これではいけないという事で、1974年、ブラジルの第5回国際盲協総会において、何とか歩み寄り、出来得れば一本化しようという決意がなされました。このあと毎年のごとく相次ぎ、両方の役員達は一本化のために努力をし、時にはヘルシンキにおいて合同役員会を持ち(1976年)、リヤドにおいては合同の実行委員会をも持ちました(1977年)。そうした積み重ねの結果が、今回のパドヴァルネールの合同役員会となりました。

国連各機関、各国政府、民間の国際団体、また盲人団体からも、厳しい批判や熱烈な要望が国団体役員に手紙や口頭で注文されられました。先ずその1つは、「国目的を持った2つの団体がこの地以上に存在し、それが国連または各国政府に同じ内容の要望が異った団体から寄せられ、しかも互いに相手を全く言わないという
状態では、誰かが盲人に援助し協力をしようという気持になされるのか」といった事で、今1つ「米国の盲人連は、盲人団体に加盟する場合、世盲連関係者のかか世盲協協がよいのか世盲協がよいのかわからない、個々の盲人であっても、彼は世盲連関係者である世盲協協でと深刻な争いがあり、こうした事では盲人の教育や福祉が後退して行くのみである」であります。

以上のような経過と、この厳しい状況下に対応するために、世盲協協呼ばれは会長のポリス・ジミン氏（ソ連）、副会長のドリナ・ノヴィル夫人（ブラジル）、アブラハ・アルガミ氏（サウジアラビア）、猿蜂英行（日本）、事務局のアダヌス・アーナー氏（スウェーデン）、会計のアーン・コリガ氏（イギリス）、前々会長のエリック・ボルト氏（英国内気のため欠席）と、世盲連関係は会長のファティマ・シャー博士（パキスタン）、副会長のトム・バーカー氏（イギリス）、事務局のレオナルド・ウルフ氏（ベルギー）、会計のフランツ・ゾンターク博士（西ドイツ）が参加して、この合同役員会とあいなんだわけであります。各々の団体は、同じ保養所に仲良く後起きを共にし、合同役員会前に各団体でどのように対応するか、1日半にわたって協議を重ねました。その結果、先ず両団体から2名の代表を出して準備合同会議を持ちましたが、結局、世盲協協の定款を改正して、盲人団体から選ばれた代表を役員総数の50％以上入れ、会長、事務局長、会計は盲人になければならないという事を記載しなければ、一本化は不可能であるという事が判明しました。そして今1つ、昭和53年5月に関かれた大陸役員会において決決された方式に従い、同年7月ロンドンにおいて世盲協協2名・世盲連2名・仲介者1名なるパドベルレブランド合同役員会準備会が持ち上がりましたが、その時に起草された勧告文、更にスカンジニア5ヶ国において決決された決議文が語識の要となります。

合同役員会は、緊張と友愛の中に2日間開催を終えました。時には一触即発、決裂寸前のところまで行きましたが、互いに理解と信頼が高まっておき、両協協とも決議文が作られました。この決議文は、時点からして持ち込むべき8月のアフリカ総会に提出し、各々の総会がこの決議文を承認するならば、1984年までに3名つなの委員を出し、計6名が作業委員となって定款改正、合同総会を持ち準備を行うという事に相互に確認が交わされました。この話し合いが終わっても、参加者等は褒賛の声を交えて互いに握手、特に調印には調印式といったセレモニーまで行いました。

長い長い時間をかかって、世界の盲人連のためにニという1つの旗印の下に、やっと歩み寄られたというその瞬間は、誠に感激的なものであり、しんしんとして吹雪く
風雪の音は、あたかも今迄の相克を哀わし、暖房の部屋は吹雪の中からやっと暖をとれたという旅人の喜びに似たものでありました。

(2) 講演文

世盲連と世盲協の役員会は、1979年2月27日と28日、パボルレブルグに於いて開催され、1979年に開かれる国団体の総会に対して次のような決議を採択するよう勧告するものである。

本総会は、多くの国々において盲人のかかっている問題を改善するために盲人援助団体の活動が非常に重要であるものである事を認識する。

また盲人を教育し訓練して有能な独立した市民とするために個人、団体によって成されて来たその先駆的な貢献を感謝するものである。

また個人的に民間レベルにおいて盲人達がそれぞれの情況に応じて目を闇に孤立した有力な盲人団体の設立に至らして歴史的な発展というものをも認めるものである。

この総会は再び盲人団体及び盲人援助団体が国際的に知識や経験を交換するための場が必要であるという事が認識されるものである。

この総会は現在おおきな地域においては将来性のある盲人団体の設立というものが極めて困難であり、こうした場合には盲人援助団体による盲人福祉活動というものが続けられ、また一層強化されなければならないという事をも認識する。

総会は、世界のあらゆる場所において責任ある盲人団体の設立という事に対して努力が行われ、全ての盲人援助団体が、このような団体の発展を促進するために協力を行い、盲人援助団体内部においてもその運営にあたり、盲人の参加を認めるという方向に向けて進まなければならないと国際を問わざるを得るものである。

総会は殆どの国々において、現在盲人自身が彼等の生活向上のための各種問題の解決において有効にそれに参加する事が出来る段階に達していると確信する。

こうした状況において盲人団体と盲人援助団体の間に今一つ協力体制が充分でないという事を遺憾に思うものである。

盲人援助団体が余りにも強く力であり、盲人団体が設立され得なかったり、あるいは存在しても充分に活動する事が出来ないような状況をも見受けられる。そこであらゆる段階において恒久的な実用的な相互関係というものが両者の間に培われ、再
団体共に互いに並となりまた相互依存という形を保存する事が必要であると強く信ずるものである。

そこで本総会は、こうした結果が誤解、困惑、あるいは努力の重複といったものが国際的あるいは地域的に生まれ、限られた資源を分散するという望ましくない様々な問題を生んだという事実をここに宣貫する。

これらの問題を除くために、本総会は1984年に世音協と世音連の合同総会を開き、その場において新しい団体の設立というものが盲人団体、盲人援助団体両者の利益を求める目的でもって討議される事に同意するものである。

その主要目的の1つは全ての国において盲人達が直接関係のある事業の運営あるいはその政策の決定等に充分に参加する機会を与えられるような円滑な責任あるまた独立した盲人を育てる場を作り出すという事である。

この新しい団体は、少なくとも各国代表の半分は各国の盲人団体から指名されねばならないという事を条件に設立されるものである。

このような目的を追求するために、本総会は次のような勧告を行う。

1.1979年に開催される両団体の総会は、1984年に世音連、世音協合同による総会を開く事に同意する事。

2.1979年度の総会において両団体の賛成によって選ばれた委員長のもとにそれぞれ3名ずつの代表を出して合同研究グループを設立する事。

この研究グループは、1981年に同時に開かれるそれぞれの実行委員会に次のようなものを提出しなければならない。

A. 1984年度総会のプログラム草案。

B. もし新しい団体の設立という事が1979年の2つの総会によって認められた場合には、こうした将来の相互関係に関する提案、特に新しい団体の定款についての提案の草案。

C. 合同事務局の設立の可能性、及びその設立可能な時期等についての研究。

3. 世音連、世音協の役員会は、1984年までに全世界的なレベルで何回か合同会議を持ちその活動、行事等についての計画をたてる。

4. 地域委員会のある地域においては、その地域の役員は、1984年度に合同会議を開く事を勧告する。

こうした地域的な合同役員会は、その地域における合同総会やまたその他の活動、行事等を合同を行う事についての計画作成にあたり、その指導を行う事を目的とする。

－64－
5. 各国においては、それが受け入れられるような状態であれば、国内的な調整委員会を設置し、世博運・世博協同サイドからの代表を出させて1984年世博総会に対しては、盲人団体の代表を含めるような方向に向かって意見を確立するよう努力する事。
6. 世博運と世博協のあらゆるレベルにおいて話し合いがより一層強化される事。
また、どちらかの団体で何らかの行事、活動、キャンペーン等を行う場合には他方に対してそれについての通達を行い、もしそれを妥当と認める場合には合意でそれを行い得るよう努力する事。

1979年2月28日

パドベルレプルグにて
世界盲人連盟
世界盲人福祉協議会

(3) パドベルレプルグにひろ
会議の会中、興奮しきった頭を冷やすために、各国代表は知恵を上げて休養を取り去げていた。ある人は雪山を登ったり、街に散歩に出たり、ベッドにひっくりかえったりしていましたが、私は温水プールで泳ぐ事にしました。長さ25m、巾10mのプールで、ガソリンで満たした溫水プールです。室内外は約25℃前後に保たれ、シャワールームは手前に出ると湯や水が出るようになっています。1人で泳いでいると、失明を解き、両腕から切断されて義手となっています。義さんは断頭者ですが、仲良く泳って来て泳ぎ出しました。切断された両腕にゴム状の具のようなものを装着し、元々の手が水を出しながら泳ぎ出します。彼はそのゴム製の手で物用にクロールで泳ぐのを泳いでいます。彼女がくくると彼もくくる。私は一時興奮し、そして、この2人の行動を耳で捉えようとしました。とにかく真剣盧戦と言おうか、障害に対する抵抗もなく、障害者体験するという不思議でなく、全くくずれあつれた夫婦がプールで嬉れているという姿を想像していただきたかったのです。もし私が同痴でなければ、あんなに優しさもできず、泳いだり、水登りをするような事が出来るのはあろうかと考えてみた。上には上がるものでなお、人間が1つ2つと客々の機能が犯され喪失していても、工夫と心の持ち方次第では、どのような可能性も挑戦出
来るという実験を目的のあたりに見せつけられ、頭の下がある思いが改めました。

1日目の合同役員会が終わり、もはや決断かという悲劇にして、白い睡気が、人々の顔をあらわにいたしました。食事も、誰も一人としてしゃべる者もなく、食事後ベーパーに持って、むっとした顔で長いウィスキーを飲んでいました。しゃべると彼の片麻痺になり、言い合いになるのはおかっているが、時ご卒業生が部屋を支配しました。そうする時は、会計の安藤信也や、英語のアリスが部屋を守って来て、ウィスキーのグラスも片手に手紙を読みとるそのもの顔をして「名神、話してご覚えて結構な

事です。この静岡市にブーツして、非常に有益なお話しを聞かせましょう」と言いました。彼の文句は、常にユーモアと微妙の間を往復し、どこまでが冗談で、どこか

らがまじめな話かわからないという、英国人独特の皮肉距がございます。何を言

うのかと皆は耳をすませました。「ある中年の紳士が、コールガールの藤原に電話を

しました。「もしもし一番疲れた若い女の子をすぐよこしていただけませんか」と言

いました。そこで藤原の主人は「食方のような由緒あるお宅に、コールガールにお

呼びになってよろしいのですか。奥さまはご承知ですか」と空虚な音でたずねま

した。彼はむっとした声で「君には関係のない事だ。すぐよこしたまえ」と受話

器をおきました。指定された時間に、非常に疲れたばかりのリビリッ女の子がやって

来ました。主人は自分の部屋に彼女を案内しました。女の子に向かって「足を脱い

で下さい。下着をとって下さい。取ったら床に四つんばいになって下さい」と命じ

ました。言われるままに女の子は下着をとって床の上に四つんばいになりました。

彼はドアの方につかみと歩いて行ってドアを開け、口笛を吹きました。すると大

きなセントハーマンダ犬が部屋に入を持って来ました。彼はその犬に向かって「お前

はこの境界まで食をとらぬが、ちゃんと食べなければ、見てごらんこんなに

ガリガリになってしまうよ」と言いました。「真面目で笑って思わずふりにとってに

この話をしたんですから、新聞を見ていていた途中は、読むやいなやっと

と笑いこけました。一時はどこまで落ち着のかと思った人もあるでしょうし、特に

ご縁人達は、私の耳元で笑いた方が嬉しいだろうかと急に笑うことをしたほど

です。こうなってユーモラスさと経験に富んだ行為は、少々時好きな事をさらごませ、各

々お国自慢の小話を順番にする事になりました。緊張解けての空気が、英国独特の

名人の手によって、一点和気あいあいの世界に調子込んだというよりも、調子込ま

れた一例です。

猛吹雪の夜食後、近くのお城に我々代表はカクテルパーティーに招待されました。

この王女さま言っても既に70才近い方ですが、私達の労をねぎらって下さると
いう事です。ここに凍った雪の上を歩くには非常に滑りが折れます。バスがお城
に着くと、100m程度しかではありません。2人～3人の人がすべてここにいます。
お城は18世紀頃に建てられた石造りの建物です。長い長い階段を登ってリセプショ
ンルームに着きました。執事らしい人が玄関を指し、いかにも古い服で
ドアの前には無言で立っています。部屋の中には銀がマントルピースの中で勢い
よくパタパタと揺れていました。部屋の大きさは150〜200畳くらいの広さです。天
井からは薄暗いシャンデリアが下がり、四方の壁には酸洗をこらしたうっそう
立てに、何百本というろうそくがユラユラと揺れていました。外は吹雪、タイムカプ
セルの中に入って何百年もさかのぼってしまったような錯覚にとらわれました。何
頃だかの馬車が雪の彼方からやって来て、そこから王女さまが王子に手を引かれ
ながら入って来るのではないと考えました。風の音が優雅なダンスの音楽にさえ
聞こえて来ます。王女さまがスウェーデン語とドイツ語と英語で挨拶をされました。

従兄弟様と従兄弟様がスウェーデン国王だということです。結婚したワインを頂き、
楕円に座ってボタネンとしていると、横のティーテーブルの上に、直径1cm位の小
きな皿が置かれていました。その皿をひねり回しだと、誰かがやって来て、
この皿が気に入られましたかとたずねます。説明を聞くと由緒ある皿で、中
には美しい花模様が描かれていました。この皿には、王女さまがあの指輪をはずして
置かれたらよく似合います。私は何となく、その皿がこよなく高価なもので、王女さ
まにとっては、このお城よりも大切なもののではないかと思いまし。帰途、何とか
あれは彼女皿を手に入れたいとフラックフルットでおちらこちらを探しましたが、な
かなか見当たらず、やって一軒の店にそれを見つけて、記念として買い求めました。
幻想と空想を折りまず、このおとぎのお城をスケッチしてみました。

(昭和54年10月2日 記)

(4) 新たなる挑戦

アントワープのホテルに1日早く着きました。ゆっくり旅の疲れを回そうと思っ
ていましたが、アーナー事務局長がやって来て、大変な事になったと申します。こ
の総合会見まで同じホテルで世界連（IFB）の総会が開かれていました（参加
国40ヶ国、出席者160名）。そこで、今年3月パリでベルルゴにて戦略的合
同会を企て、大変な会計にしたが、国際的な調印文は、否決されたという事です。長年か
かってやって来た努力も無駄になってしまったとがっかりしています。その後を時
から世盲協の緊急役員会が開かれました。世盲連の副会長でもあるサウジアラビアのアルガニム氏が興奮して着席しました。彼は何かに懸かったような説話を発言しはじめましたが、こちらからうまく組織だった質問をしていかがり、つぎはぎだらけの学生論文のようにになってしまう。要約すると次のようにになります。イスラエル出年のアフリカ人が、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの盲人進と現実、アルガニム氏が周団体の仲間に努力した事を、世盲連を世盲協に売りつけただけからん人物と公言したそうであります。世界の情勢にどう盲導者（特に開発途上国）は、これを何等とにして、アルガニム氏はだめだという事にからい、世盲協と世盲連の次元高い統合という理念はどうかへ置き去られ、ただ感情的に否定されるものに行われた一という事です。世盲連のない無知な人間ほどデマにまどわされ、無知なるが故に感情的となり収束がとれなくなる。それが残念ながら盲人であり、そう批判する自分もまた盲人であるという事が、世盲連総会に参加した人々の声のようでありました。しかし、外部に対する世盲連倒の言い分は、未だ盲人団体（of the blind）が結成されていない国が多数ある事、いまひとつは、盲人は聴覚者を抜きにして、盲人だけで依頼を断わし、言いたい事を言える場所がほしい、それでは世盲連以外はない、こういう2つの理由から統合には反対する、たとえ世盲協との協力は費むものではない、よってこうした結果が生まれたという事です。いずれが正しく、いずれが間違えであり本音であるのかよくわかりませんが、とにかく種々のありた事実により、パドブルレブルの調印文がすんなりと通過しなかった事は事実であります。その夜、午前1時まで、世盲協としての対応案が協議されました。

この報告を聞きながら、私はアルガニム氏が世盲連を世盲協に売り続けて来たそうと問題については事実無根であり、毛頭そうした気持ちも誰にない事はわかりますが、その他の理由については、痛いほどよく理解出来るような気がいたします。前述のパドブルレブルの報告にも書きましたが、1964年のニューヨーク総合会、盲人の聴覚者に対する不信感、そこから派生する攻撃的な活動が表面化してきました。暗闇の中に閉じこめられ、自らの一生を穏やか生きて行こうと決意する盲人が社会から受けた多くの打撃や中傷、また無理解、聴覚者ののご都合主義など、その理由には手放しのないともまい程です。

こうした盲人連合が、外界との接触を断って、盲人だけで何らの交通や隣接もなく、誰れをはばかる事もなく発言が出来、お互いに語り合う事によってうっ憊を晴らし、相互の経験をふたまけ合う事によって、勇気づけ合い理解する場所も理解抜きで必
要かと思われます。しかし相互に理解し合えたとはいえ、それは問題の解決に何ら
建設的な意味を持たない事も事実であります。ましてこの世界がもとどと啓蒙
者によってつくられ、その中に住まねばならない盲人達にとっては、ここに生活し
よろしい限り、いかに理由があるともこれに対応する姿勢と社会との協力、更
に社会に埋められたソースの掘り起こし、掘り起こされたソースの活用が必要
であります。それは、例えばアイボリーコーストの代表が述べていた如く、
ここ1世紀の間に盲学校を出た盲人はただの1人しかいない。全ての盲人は全くの
無学文盲であるという事実も見逃がすわけにはまいりません。無学文盲の、その
結果が誰れを信じるかと言え、真に盲の理解者である盲人以外にはありますまい。
こうした事を思う時、欧州や日本を含め先進諸国が選んだ盲人達にとっては、
バドルレプルップの調印文は正に次元高い理解かもしれませんが、そうではない盲人
達にとっては、これを承認する事は非倫な冒険であり、越えてはならない一線（暗
啞者との妥協）を越える事になります。

世盲協の役員会は、世盲連の今回のような処置に決して軽い不満を抱くものではなく、
むしろ逆に心痛む思いで理解を致しました。私達は世界の個々の盲人のために、長
い時間をかけて、特に開発途上国の教育・福祉の定着に、より円滑な知恵を、客
観的な判断が、今より以上に出来るまで待つとともに、より積極的にそうした次
元へ到達するための準備と設備投資をやるねばならないと考えました。よって世
盲協の役員会としては、常に窓を開き、いつ呼びかけがあってもそれに応え得る体
制を作っておく事、統合は出来なくても常に協力という経はかけておく事という2
点を再確認し、役員会としての態度を実行委員会に有り、実行委員会の名におい
て総会に持ち込むという事になりました。実行委員会においては既々これを丁し
ました。しかし中には、今さら別に協力をしなくてもよいではないかという意見も
ありましたのが、総会において長い長い論理的な討議の末、結局別記にあるとくに示
された論文（本総会決議①、②）を得たのです。その結果、総会終了後に新役員に
よる世盲連との合同役員会において、団全体より3名の代表を出し、いかにして協
力体制を作り上げるかの基盤整をすると共に、委員長を第三者に依頼するという決
議がなされました。国連の事務総長に依頼していた話も出ましたが、結局国連
の中で盲を理解し、国際的に理解し、観客的な判断が出来得る円滑な事で、
団全体の事務局から国連に依頼する事になりました。世盲協の実行委員会としては、
問題が重大であるため、アメリカ・ソ連・英国がこれにあたり、盲目的弁護士オーガ
ラル・ミチャー氏（米国）、前会長ポリス・ジミン氏（ソ連）、前々会長エリック・ポ
ルター氏（英国）がこの任務を担当する事になりました。なお国連より派遣してもらう委員長には、ILOで活躍され現在ECEの役員であるルクセンブルクのアーサー・ベネット氏が有力候補となっています。

3．第6回世界盲人福祉協議会総会より ——アントワープにて——

(1) 開発途上国の課題
政治・経済・軍備等の国際問題の中においては、よく東西問題と開発途上国の問題が話題にのぼります。しかし私達世盲協の中においては、国境・人種・イデオロギーを超えて、盲人のためにという観点で議論がありますので、東西問題についてはまったくなしでないんです。しかし開発途上国の問題については、あまりにも話題すぎたこの開発途上国と先進国の間の謎を、いかにして埋めるかという課題が、世盲連との関係以上に深刻に討議されました。

最初に書きましたごとく、この格差を埋める目的のために、ナイジェリアで総会を持ったというのですが、不幸にも実現しなかったわけですね。それにもかかわらず、実に多くのアフリカ大陸からの参加者がありました(17ヶ国、31名)。この多くの代表から聞かされた実情は、まさに目をかすめもののあります。それは農村問題、失明防止、教育、リハビリテーション、職業、盲人用具、開発途上国への援助という各チャンネルから見た目まわりにされてまいりました。しかし一般に言える事は、広大なアフリカ地帯が、超大盲人人口を有するアジア地区、そしてラテンアメリカ地区において、中でもアフリカ地区より最も要望される事は、“盲人の人間らしい生活を”という事でありました。人間とは、どのように定義づけられるかは、各々の時代・文化等によって異なりましょうが、しかしこれは次のように望んでいるようです。最低限必要な衣食住を満たされ、最低限の文化的恩恵に恵まれることと言えるようです。今、開発途上国においては、1分間に6人の人が嘘死または戦鬪によって死亡しているといわれています。そうした中に最も比率の多い死者者は、行動力に奪われた盲人だという事です。地中海に面したチュニジアや、高度な伝統と文明を有するエチオピア、その他数ヶ国を除いては殆どの国に盲学校らしいものはありません。ただミッション系の盲学校やリハビリテーションセンターが存在していますが、これとかもおびただしい天文学的な数の盲人を対象として
は、続け石に水の感があります。前述のごとく、アイボリー・コーストでは今世紀において盲学校を出た学生は1人のみとか、全てが無学文盲のままに放置されています。しかもその生活は先進国におけるベッド以下だと言っても言いすぎではないようです。

更に、失明者の増加率という点では、手のつけられない状態でオンコセルウィアシス（リバープライド・発盲紫外血症）の猛烈な蔓延が、アフリカの人々を恐怖のどん底に落し入れています。ヒラリヤ寄生虫の一種（発盲紫外血症）で、ハエが媒介となり、この寄生虫が付着した食べものを食すると、ほとんどが失明すると言われています。特に最もひどい地域はサバンナ・デ・アバガルタ地方であり、全村全員が盲人というところもなくないそうです。因みに日本の失明者の出現率は10万人に対し約260～270人という事です。しかしWHOの推定では、この地域は10万人に対し8千人～1万3千人とも言われています。更に目をアジアに向けてみますと、たとえばインドにおいて就学適齢対象児は1千9百万人ですが、その約半数がビタミンA欠乏症、角膜軟化症により失明のおそれありという事で、インドネシア、パンガラデシュ、ネパール等もこれに似た状態であります。

さて、こうした失明のおそれのあるものの、または治療可能な患者に対して眼科医がどれほどの用意されているかWHOの統計によりみてみますと、日本は人口比率からいうと2万人に対し眼科医1人、フィリピンは10万人に1人、インドは17万人に1人、中国は20万人に1人、インドネシアは100万人に1人パンガラデシュは150万人に1人、ネパールは300万人に1人、となっていますが、アフリカ大陸においては治療を持っている患者がわずかにわずかに300万人いるというが、それに対応出来る眼科医は、アフリカ全土で300人しかいないという状況であります。

こうした状況から推察してまいりますと、近く世界の盲人総人口は4千万人に達し、しかもも先進国の盲人に対する教育・リハビリテーション・職業問題が、科学的な方法において処理されているのに反し、開発途上国はますますから遅れ、放置されたまま、開発途上国と先進国の格差は厳しく一方だということです。よって、何から手をつけるかという課題でありますが、アフリカの盲人代表は、清潔な水、衛生・栄養・教育の廃にその対策を訴えました。清潔な水だけを取り上げても、完備された水道と上水設備が必要であり、衛生面に入っては下水口の付設は hindi、各家に便所、各村や町に保健所の設置が必要であり、栄養面では何よりも母親の栄養知識の普及から開始されなければならない。しかしこのような事どもはあまりにも膨大な費用と年月を要します。盲人協の力では到底負担いけるもので
はありません。参加国の人々はただその頃から悲鳴に喚然とするのみでありますが、
とは言え放棄する事もなく由、こうした事を先進国首脳会議や国連理事会におい
て、ただ、盲という願うでとらえるのではなく、人類社会の危機という形におい
て取り上げてもらうよう働きかける事の必要性が論じられました。中でも各国
からアメリカ・ソ連・日本・西ドイツという順番で、さまざまな国名を指名して、こ
うした課題と真剣に取り組むよう、参加65ヶ国から厳しくもかつ激烈なる要望がな
されました。

さて世間事として具体的に取り上げる道は、失明防止と教育・リハビリテーシ
ョンの面であり、特にアフリカに近いヨーロッパ地区、アジアに位置する日本と周
辺地域であるオセアニア地区、ラテンアメリカに対してはアメリカ・カナダに、当
然その具体的な解決の責任がある事が各国代表より明示されました。アメリカやソ
連・日本・ヨーロッパ諸国からコンピューターを利用した高度な盲人への科学的対
応が発表されると、その素晴らしい発展ぶりに驚嘆の目は向けられたものの、逆に
それだけの余力と財力があれば、何故開発途上国への援助をしないのかという反話
と思われるものさえも見られたほどであります。今までの総会が、先進各国の科学
的進歩と発展の状況を報告し合い、その進歩に興奮したのに対し、今回の総会は、
そうした進歩の発展をもろはし色あせ、開発途上国への援助と、どの国でどのような
解答計画が出来るかという事こそが大切であるもようになり、今回の総会の顧問を特徴にしましょう。

アメリカ・ソ連・日本・西ドイツ・世界開発銀行・EC・先進国首脳会議という
有名な頭は、ことあるごとに各国代表の発言の中見られ、しかもそれが開発途上
国に向け何をしてくれるかという、厳しい怒りの声あえがされるほどの教訓を講
を持っていました。特にこれを畏れざる政府関係・財界関係の方々に知っていただ
きたいと思います。なお日本にとっては、今やアメリカに次ぐ工農生産能力を持ち、
経済大国となった今日において、ただ自国ののみを考えて考える時代は過ぎ去り、世
界に対する責任ある発言と、中立的な教訓を助け、当然の義務として厳しい監視の
中に登場して来た事を自覚させねばなりません。開発途上国の人々ははっきり申し込
ました。「開発途上国の問題の解決なくして、先進国だけの栄光栄誉の時代は終わった」
ということでありました。

(2) 盲人の行動調査
1964年の第3回ニューヨーク総会の間、盲人の単独歩行については、
K西南北を問わず非常な関心が寄せられるようになりました。今日、盲人の単独歩
行を可能にするためには2つの方法があります。自杖によるものと盲導犬によるも
のです。

これらを容易ならしめるために、補助具として超音波メガネ（Soniguid）が配
用されています。自杖による単独歩行の技術は、第二次世界大戦中、米国のペンシ
ルベニア州のパレフォージ病院にて、失明脳疾患患者の治療にあたっていたリチャ
ード・フーバー博士によって発案されました。よってこの技術をフーバーケーン・
テクニック（Foover Cane Technique）またはロングケーン・テクニックと呼び、
総称してハリパトロジー（Peripatoloogy）又はオリエンテーション・アンド・モビ
リティー（Orientation and Mobility 歩行訓練以下O&M）というיבוいます。

自杖が、盲人にとってなくてはならない補助具となったのは、1930年アメリカのイリ
ノイ州の州の法律の中に取り入れられ、国際ライオンズクラブのカナダにおける世
界大会（1931年）において公認されています。盲導犬は、1861年ドイツで軍用犬を
改良して開発されました。我々は、昭和32年には初めて一頭輸入されています。ま
た“こうもりの原理”を応用したもので、超音波を発しエコーを返ってきた
音を選別することにより、視覚に対する障害物の視覚、広がり、大きさを知る超音波メ
ガネが生まれました。これは1960年頃、ニュージーランドのカナダ商務大学のケ
イ博士による研究からはじまり、1970年頃にワーマルク・ビジブランド社（アメリカ）
で完成されました。盲人的単独歩行には、その他種々の補助具がありますが、例え
ば同じニュージーランドで開発されたモワット・センサー（Mowat Sensor）、アメ
リカやスウェーデンで作られているレーザー・ケーン（Laser Cane）、またソ連の
視覚欠陥学研究所で開発された胸から下げる超音波触知器等々があります。

1964年までは、欧州、アメリカ等において最も利用度の高かったのは盲導犬であ
りましたが、この頃を契機にしてO&Mが、急速なきわめて世界各所に広まってゆ
きました。人間が生まれてから最も最初にしなければならない行動は、母乳を
飲むこと、次いでハイハイから寝たたに歩く事であります。歩行という事は食べ
ることと同様、人間の最も基礎的な行動でありますが、失明という特徴は、この歩
行という課題を概ねからつかがえし、人間の行動を一切否定致します。とにもかく
にも中総合発表が社会に再現するためには、この歩行、もっと大きく言えば、行
動を容易にすることから始めなければなりません。それは盲人自身に、自覚と
自信と勇気を与え、自らの行動の限界を知り、社会への対応の精神的な自覚を促す

—73—
基礎にもなります。とは言え、開発途上国に住む盲人、交通戦争の激しい大都市の盲人、山野・島深い密林または埋没される海岸に住む盲人等々、種々ありますが、にくかくその土地において最も適切な材料で杖を作り、自らの望むところに、あらかじめ教えられた基礎的な歩行技術を利用して目的地に安全かつ効率的に到達する事が歩行訓練の原則とされています。

今、アジアには1千万以上の人々がいるようですが、こうした人々を対象として、歩行訓練士は、このアジア全域にわたり200名程しかおりません。そのうち100名が日本、あとの100名が全アジア地区におります。アメリカにおいては、歩行訓練指導員は大学院の修士コースを経て、マスター・オブ・アーツの資格が与えられていますが、アジアの場合、日本においては厚生省の委託で、日本ライフハウスにて3ヶ月間の講習のあと、修了証書が授与されています。他の国にあっては、特殊な場合、アメリカ・オーストラリア・イギリス等に留学してその技術をマスターしますが、あとは短期間の講習会か、または見よう見ねでたたき上げた步行訓練士がいるだけです。ましてアフリカ・ラテンアメリカ等においては、步行訓練士という名前さえも知らない国々の多いことを知らねばなりません。盲人が教育を受け、職業や家庭を持つためには、点字の習得よりも先にしなければならない事、それが単独歩行といわれています。かかる歩行をマスターした盲人は、先進国においては盲導犬を持つ事が出来ますが、開発途上国においては不可能な事であり、碓氷の杖を使っての歩行は孤独ですが、盲導犬の場合は、もれなく言いませんが奥行き伴侶であり、孤立からの開放に最も道した方法といえるでしょう。

総会開催中、白杖を使っての步行訓練の成果が、いよいよ見えても実証された名を例として、ガチタラの地表があげられました。国土の80％近くを災害に見われたガチタラにおいては、多くの罹災者が出ました。もちろん盲人もその中に含まれておりました。日本に住む先進国の人盲団体・施設から Sonata 寄付が寄せられ、かつサウジアラビアからラテンアメリカ盲人のために、救済物資や義援金が送られたことが報じられました。地震・火災や水害が時を経て使用不能になった時間の中で、お互いに連絡をとることが困難であり、特に救済命令や救援依頼の緊急を要する連絡を、どのようにして行うかが非常に大きな問題でありました。この時に歩行訓練をマスターした若い盲青年達が、あらかじめからの緊急連絡や物資運搬の道案内として活躍したという事であります。歩行訓練は、単に盲人自身の自立のために役立つのみならず、こうした緊急の場合にも活用出来るという事が実証された。
のです。
昨年12月の第5回アジア盲人福祉会議（於香港）においても言われましたが、歩行訓練の技術を個々の盲人に徹底させるためには、盲人団体の長・施設長・盲学校長（盲人の場合）が、盲人単独歩行をしなければ、その成果はあり得ないと、再度この経緯で大きく判明したのも意義深いものでありました。「おえらさんは、ひとりで歩け、ひとりで歩けと口かましく私達に言いますか、それ盲人ほど余裕を進めて歩いている例が多いのです。それでは歩行訓練は普及しませんよ」とは、かみながら読んじてくれた若い盲青年の言葉には、夢をかなわせきされるものがありました。

(3) 盲人のスポーツ
1977年サウジアラビアのリヤドにおいて開かれた実行委員会において、世盲協の中にスポーツ委員会を新たに設置することが決議されました。最初の委員長には東ドイツのヘルムート・ピーラッシュ博士が就任しました。
1964年以降、有能なる社会人として一般社会に盲人が活躍する場合、そのパフォーマンスはリクリエーションとスポーツであると言われています。もちろん個々の盲人の趣味・趣味・体験向上のために必要ではありますが、障害者と盲人が互いに意識することなく、スマートに楽しみながら融合出来るものは、この2つをいいて他にはありません。しかもそれは盲人だけのリクリエーション、盲人特有のスポーツを強調するのではなく、障害者達が持つリクリエーションやスポーツに、盲人がどのように対応し参加出来るかという事があり、大きく叫ばれてまいりました。スウェーデンにおいては盲人団体が単独でリクリエーションやスポーツ活動をするのではなく、必ずその都市、その町・村の障害者達と共に参加し合う方が、スウェーデン盲人協会の基本的な運動方針とされてきました。1972年、各盲人協会分会で社会人参加のため合同で行われたその回数は、実に年間600回におよんでいます。
今1つ先進国における当初の盲人団体の運動目的は、盲人のニーズを社会に訴える、国家地方公共団体から政策を獲得し、法律を実効する事でありました。しかし法の完備、補助金の充実等により、その必要性が除かなくなってきた時、何処を見たばか色々な面で障害者との間で課題が出て、過去のみならず今後大きな問題が発生している事に気がつきました。それと共に、盲人自体の中に権利を主張し、要望することのベテラン戦士が多くあっても、社会との交流を考える人々が少なくなって
いった事に気づいた指導者達は、特にリクリエーションとスポーツに力を入れるようになりました。「盲人は盲人だけでなくまっただけではない。盲人は勇敢に社会に進出
すべきである」とは盲目の通信大臣ヘンリー・フォーセットの有名な言葉でありま
すが、この言葉を聴く近道こそ、リクリエーションとスポーツにあると先進国の
指導者達は考えました。こうした背景のもとで、世盲協はスポーツ委員会の設置を
1977年に認めたわけであります。

身体障害者を全て網羅している国際身体障害者スポーツ協議会(ISOD)がありま
すが、先ずピーラッシュ氏はこの団体との友好的な連絡をはかることに力を入れま
した。その結果、両団体より同数の代表を出した技術委員会を組織し、そこで色々な
問題を処理することになりました。また各地域委員会の中にスポーツ委員会を設け
ISODと合同して出来る競技会に必ず世盲協からも参加すること等が、この総会
までに準備されました。その結果、各団体に適したスポーツの種類がピックアップ
されました。中でも柔道、水泳、フェンシング等は重点競技種目として話題にの
ぼっておりました。最終的にはわずかずるISODの事務局長が出席、円満にISODと
世盲協の人事交流が終了したので、今後は全ての身体障害者競技会に世盲協を招致
する旨の発表がなされました。特に感謝深い聞かれたのは、南ア連邦がアフリカにお
いても他の地域においても、国際会議はもちろん各種スポーツの競技会にあって
もその参加を拒否されてまいりましたが、世盲協が人種を超え、政治的なもの一
切を排除している事前から、南ア連邦を正式加盟国と認めていこうという事です。
ってISODの国際競技大会にも世盲協を通す限りにおいて、南ア連邦が参加する事
を許可された事は、明かしいニュースでありました。また会議の席上、アメリカの
盲人達は非常にグループとボーリングが得意である。またユニオンビア、アルゼンチン
等の代表からは優秀な盲人サッカーチームがある。英国の代表からは盲人のクリケッ
ト選手がいるからと次々に発言があり、我々思いきって対抗試合をしきませんが
との説きがありました。

(4) 盲婦人問題

1978年12月に行われた第5回アジア盲人福祉会議（於仏南）で、盲婦人問題だけ
が特に取り上げられ、また決議の中に一項目を設けられました。今日までの25年間
の世盲協国際会議をひも解いてみても、全て視覚障害者という観念の中でも、男
女共に扱われてまいりました。しかし発展史上にあっては、宗教上の理由と、い
ま一つは、極端な男女の差別という原因により、男子の教育・福祉・職業開拓は進歩したと言え、盲婦人の地位の向上、視覚の開拓は、開発途上の国や問題にかかわらず、遅れを見ているといわれています。その1・2の例を挙げてみましょう。

アジア、中近東においては図書の国が多くあります。図書の収集は、婦人が単独で外出する事を禁止しています。ましてや盲婦人の場合はなおさらです。そのためほとんどが学校、家族から社会からも盲婦人の存在さえ忘れられていたのが現状であります。よって盲婦人の職業問題、ましてや結婚問題などは、とうてい想像も出来ない課題であり、婦人参政権などは遠いです。アフリカのウガンダその他にあっては、結婚の場合、男性側からウサギ、ブカ、ウシ等を持って花嫁を買い求める行きうくすです。（日本でいう結婚のようなものだと思いますが、現地の人々はあえて女を買いに行くと言いますので、その通りに書いておきます）もちろん盲婦人などは、誰れも買い求めるなかったようでありますが、ここに農業訓練センターが出来、盲婦人を収容して種まき、除草、脱穀、養鶏等の技術を教育すると、早速に買い求める手がついたといいます。またアジア地区においては、盲婦人の仕事と言えば、売春もその1つであります。かつて「盲婦」という言葉がありましたが、売春婦に逃げられないようにする為と、客を選び難しし為に、人為的に盲婦人が作られました。今でも香港あたりには、姿をさせない盲目的売春婦が多いいるそうですね。

こうした事によって、今までの総会においても、何故盲婦人の問題だけを取り上げて討議しないのだという不平不満が、除ききり出されていましたが、とうとう会議の最中、数名の婦人代表から緊急提案が成され、「貴方がたはほとんど男性であります。討議の中でも、よく一盲人でも昨今は盲婦人と結婚する事が容易になりましたと、不用意な発言がありますが、その逆に立場にあった発言は、ほとんど聞くことができません。いったい盲婦人の教育・結婚・職業について、今まで何を考えてくれたのですか」と厳しいお申しかがありました。男性代表は、まさに闇として声をなく、ごもっともであるという意思表示をしたにすぎませんでした。会議期間中もどう中間あたりで、「手引きを含め、この総会に参加しているご婦人達は、暗闇を問わず全て別室に集合して下さい」というアラームがあり、会議場に残る男性だけという、いまだかつてない珍現象さえ観られました。急きょ、決議委員会は、婦人問題を決議の一項に入れ、団体間協力促進委員会を措置して、盲婦人委員会を新たに設置することも討議しました。こうした男性がたの大あげての緊急措置によって、一応おさまることは出来ましたが、それが終わった時に、男性の中から
発言を求められました。「ご婦人の方の力の強さと恐れには、我々男子一同身にしみて感じずるものがあります。こういう状態であれば、皆様ご婦人のお力は強くなるでしょうが、逆に男子の方は、益々小さくならざるを得ません。出来得れば次回の総会の時に、男子の委員会を作りたいものでしょうか」という発言にどうと爆笑という一幕もありました。

新しい実行委員会において、婦人委員会をどのような名前のものか、また誰が委員長にすべきか、議論が繰り返されましたが、婦人しだいから「男子の方々にはご意見をいただい。我々婦人で名前を決める委員長を作ります。」という事で、婦人委員会の正式な名前は全員のままでしてあります。昨年、イラクにおける第2回の世界婦人大会が開かれる予定になっていたが、イランの政変にあり、おそらく来年マレーシアで開かれるでしょう。この問題があって以来、インドとチェコスロバキアの代表と食事を共にして、私は「戦後、日本では婦人の力とストッキングが一番強いかった。」と言いましたが、我々の国でもその通りだと思うよと笑いながら返答がかえってまいりました。

(5) 失明防止

『開発途上国の課題』の項においても取り上げたように、開発途上国においては、オーロン症、カイアシス、トラコマ、栄養失調、ビタミンA欠乏症、角膜軟化症、白内障、外傷等により、視力障害者は日ごとに増加の一途をたどっています。しかし先進国においては、違った原因で失明者が増加しております。アメリカ眼科学会よりの報告によりますと、医学の発達により、男女共に高年令者が増え、ここ2-3年の間にその数はピークに達するであろうと言われています。しかしこの中に老性白内障、糖尿病等の原因で、老人中約80％が失明または失明のおそれであるというもので、そうすれば盲老人に対するリハビリテーションの対応も出来なくなり、まして医療の力でこれを抑えることも出来ず、お手足であると報告されました。更に工業、交通事故等により、壮年層の中失明者の増加もあると恐れが寄せられております。開発途上国と先進国の失明要因は、原因こそ違え、きわめてやや続く問題であり、過去数年前では世界の盲人総人口は、2千~2千5百万人と言われていたましたが、数年後には4千万人になろうとしています。その数はちょどベルギーの総人口の4倍にあたります。

昨年8月當川真一氏の勇気ある決断により、昭和御経営会からWHOに対し、失明
防止のために20万ドルが寄贈されました。それが1つの呼び水となり、西ドイツ、アメリカ、北欧諸国等からも相当多額の寄付金が、失明防止を目的としてWHOに集まったという事です。そこでWHOでは、失明の視野からいかに失明防止を実施するかというプランが、今年2月にジュネーブにおいて作られました。また遠大な地区の失明防止についても、本年4月フィリピンにおいて第1回会議が開かれました。こうした経過をたどって、WHOは失明防止を重大問題の1つに挙げ、この対策に全力投球する事になりました。このような大きなきっかけを作られたحيح良兼一氏に対し、世界保健アジア委員会は感謝状を贈り、世界保健の失明防止委員会と世界失明防止協会（IAFR）は、感謝の言葉を述べていただきました。また1969年のニューヨーク総会決議により作られたアジア眼科医療協力会（会長：岩橋英行、日本ライトハウス内）主たる活動は、統一常任理事の周陸桂博士を通し、過去6年間におわたりネバール王国に向けられました。その内容はアイキャンプ、急性用機械器具等の寄贈、視覚障害者の研修、コンタクトレンズの研修等々の活動であります。その結果、最初失明防止に目もくれなかったネバール政府が、最重点項目の1つに失明防止を取り上げたという事は、日本にとってもうれしい出来事の1つであります。

※以下は次号（第12号）に掲載いたします。